

平成18年度

学力向上拠点形成事業【実践研究の概要】

県教委への報告資料（平成19年3月）より

1 学校の実態

児童数 222名 職員数 18名

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	合計
児童数	36	35	36	46	33	34	2	222
学級数	2	1	1	2	1	1	2	10

2 研究の概要

(1) 研究主題

学ぶ意欲とスキルを高め、確かな学力を身に付ける子どもの育成 - 知的好奇心を喚起する指導方法の工夫・改善を通して -

(2) 主題設定のねらい

【今日的課題から】

子どもたちを取り巻く環境は日々変化し、テレビ・雑誌・インターネットなどからさまざまな情報があふれている。さらに、少子化、核家族化、人間関係の希薄化などにより、家庭や地域社会における教育力が低下していることが指摘されている。こうしたさまざまな社会的な課題に加え、子どもたちの学習意欲の低下や、基本的な生活習慣が身に付いていないこと、体験活動や読書活動の不足、学力や体力、コミュニケーション能力の低下などの課題も指摘されている。

最近の全国的・国際的な調査の分析結果からは、児童の学力についての様々な課題が明らかになっている。平成14年1月に文部科学省から「学びのすすめ」が発表され、確かな学力の育成の重要性が指摘されている。学びの根幹となる基礎・基本（読み・書き・計算）の確実な定着を図るとともに、学ぶことに喜びを見出し、生涯を通して学び続ける姿勢を身に付けさせることは、学校教育に課せられた喫緊の課題である。

【学校教育目標から】

本校では、新しい時代を生き抜く心身ともにた

くましく、知的で思いやりのある、しかも主体性と創造性に富んだ実践力のある「健康な子ども」の育成を教育目標として掲げ、目指す児童像として「思いやりのある子ども」「よく考える子ども」「体をきたえる子ども」の3つを挙げている。他者への思いやりの心を育てながら、課題をもって学習に取り組み、よく考え、自己を豊かに表現することを子どもの姿で実現していくことが、教育目標の具現化につながるものと考えられる。

【児童の実態から】

これまでの宮城県学習意識調査の結果を見ると、本校児童の学習に対する意識（学習の大切さ、学習する理由、学習意欲）は決して低くはない。しかし、日常の学習活動の様子を観察していると、主体的に課題を設定し、自ら学ぼうとする本質的な学ぶ意欲の高まりは十分満足できるものではない。また、新たに学習した知識を既習の知識と統合し、さまざまな形で表現する力についても満足できる状況ではない。これらは、効果的に学習を進めるための技能（学習スキル）が身に付いていないことに起因するものと考えられる。この点に着目した指導方法の工夫・改善が必要である。

【学力向上拠点形成事業の趣旨から】

本校は、平成17・18・19年度の3年間、文部科学省より「確かな学力育成のための実践研究事業」の指定を受けている。宮城県教育委員会から示された本研究推進に関わる基本方針は、以下の3点である。

児童の学習意欲向上への取組

小・中学校の連携した取組

家庭学習習慣化への取組

子どもたちの学習意欲を高めるためには、何よりも「わかる授業」の展開が欠かせない。子どもたちの知的好奇心を喚起するための発問や指示、ノート指導、ICT活用など教師一人一人の授業力を向上させるための授業改善が必要である。このことは、子どもたちに基礎・基本を確実に身に付けさせ、それらをもとに自ら学び自ら考える力など「生きる力」を育成することを目指すことであり、「確かな学力」の土台となるものと考えられる。

また、子どもたちに学習スキルを身に付けさせることも大事な視点である。発達段階に応じた学習スキルの指導は、学習内容を確実に定着させるためだけでなく、授業での学びと家庭学習を有機的に結び付けるためにも不可欠なものである。

最近の調査で、家庭学習が学力に大きな影響を及ぼしていることが次第に明らかになってきている。家庭での学習習慣・生活習慣の見直しも含め、学校と家庭の連携・協力の在り方を探ることが、子どもたちのよりよい成長と学力向上に資するものと考えられる。

【これまでの取組から】

昨年度は、ミニ授業研究会（21回実施）を通して、ノート指導やICT活用、話し合い指導、T・T及び少人数指導等に積極的に取り組んできた。また、全校表現活動や朝読書、寺子屋タイム（スキル学習）にも継続的に取り組んでいる。さらに、家庭での学習・生活習慣に関する実態調査を2回実施し、分析結果をもとに学習・生活習慣等の改善に努めてきた。これらの成果を生かしながら、よりよい指導方法や学習環境等の工夫・改善、教師の授業力向上を図り、子どもたちの学力を向上させていきたいと考える。

以上のことから、本研究主題を設定した（図1）。

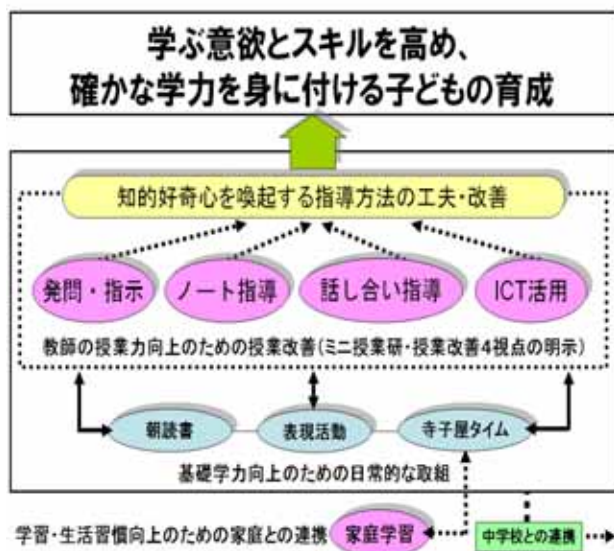


図1 「研究主題に迫るための指導の手立て」概念図

(3) 研究組織図

研究推進委員会及び研究推進プロジェクトを中心に組織する。学年部については、必要に応じて招集し、研究に関する協議を行う（図2）。

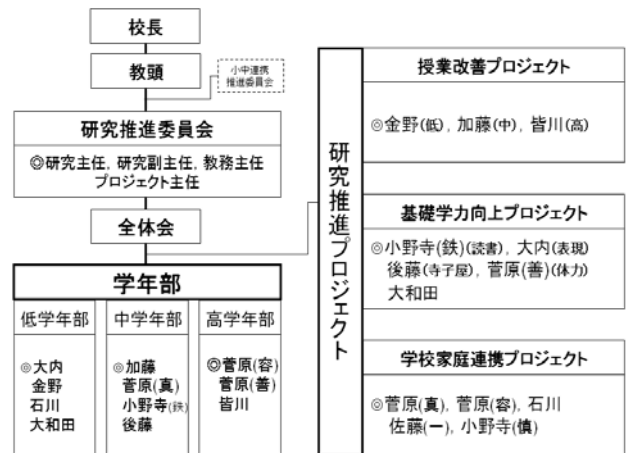


図2 研究組織図

3 研究成果

平成16年度以降に実施した標準学力検査（3年以上、国語・算数の2教科）の結果を分析したところ、平成16年度にはいずれの学年でも全国平均を下回っていたが、平成18年度（図3）には3年・5年・6年で国語・算数ともに全国平均を上回り、4年においても全国平均に迫る結果となった。

このことから、本校児童の学力は【向上傾向にある】ことが認められる。

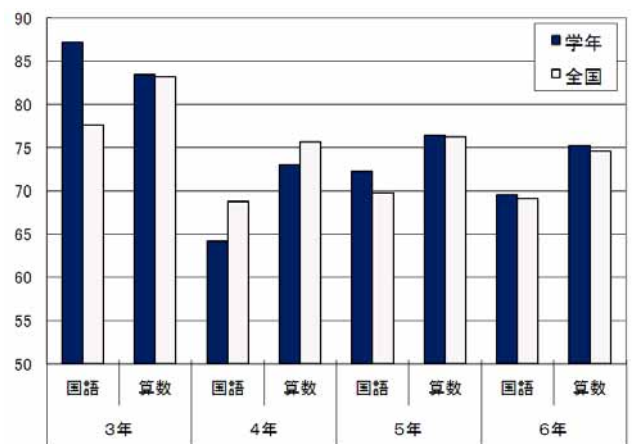


図3 標準学力検査の結果（平成18年5月）

今年度の研究成果を、各プロジェクトの取組を中心に整理する。

(1) 授業改善プロジェクトの取組について

授業改善の4つの視点（発問・指示，ノート指導，話し合い指導，ICT活用）を指導過程に位置付けた研究授業（ミニ授業研）を行うことにより，子どもたちの学習意欲を高めるための授業設計についてより深く吟味することができた。また，評価項目や評価指標を吟味した授業評価シート（図4）をすべての研究授業で活用したことにより，事後検討会で話し合いを焦点化して行うことができた。

校内ミニ授業研 <授業評価シート>			
授業クラス	年 組	教 科	
平成18年 月 日() 校時			
発 問	Q1 子どもたちの考えを深める発問をしていたか。 (〇_〇) とても (△_△) していた (□_□) 少し (×_×) あまり		
指 示	Q2 1回の指示事項が少なく，必要なことを簡潔に指示していたか。 (〇_〇) とても (△_△) していた (□_□) 少し (×_×) あまり		
板 書	Q3 ノート指導に生かすための板書を工夫していたか。 (〇_〇) とても (△_△) していた (□_□) 少し (×_×) あまり		
話し合い指導	Q4 子どもたちの発言や考え(つぶやき)を生かして授業を展開していたか。 (〇_〇) とても (△_△) していた (□_□) 少し (×_×) あまり		
IT 活用	Q5 IT活用の目的が明確で，必要な場面で効果的に活用していたか。 (〇_〇) とても (△_△) していた (□_□) 少し (×_×) あまり		
学習スキル	Q6 学習スキル(学び方)の定着を意識した指導がなされていたか。 (〇_〇) とても (△_△) なされていた (□_□) 少し (×_×) あまり		
全 般	Q7 子どもたちの学習意欲(知的好奇心)を高めるための工夫があったか。 (〇_〇) とても (△_△) あった (□_□) 少し (×_×) あまり		

図4 授業評価シート

ICT活用については，「ICT活用の目的と効果的な活用場面の分類表」（図5）を活用したことにより，授業でのより効果的なICT活用場面を意識するとともに，授業での活用の在り方を客観的に振り返ることができた。

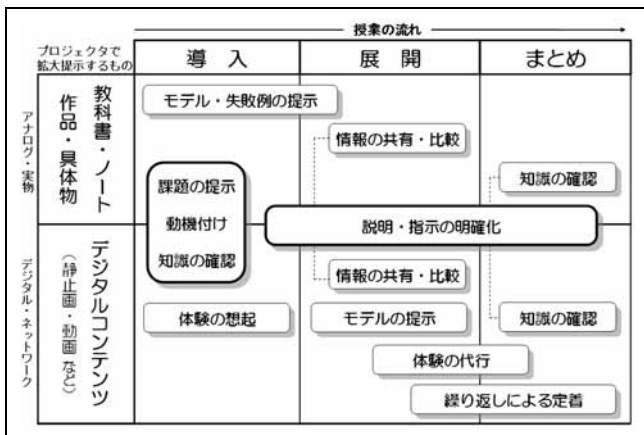


図5 ICT活用の目的と効果的な活用場面の分類表

(2) 基礎学力向上プロジェクトの取組について

子どもたちの豊かな表現力を養うことを目的に取り組んできた全校表現活動では，昨年度，一昨年度からの積み上げが表れてきており，全校で表現する楽しさを味わっている様子が随所に見られた（図6）。



図6 身体表現活動「よさこいソーラン」

読み・書き・計算など基礎的事項の習熟を図ることを目的に週3回ずつ取り組んできた寺子屋タイム（図7）が習慣化し，15分間，前学年の復習問題に取り組み，成績が向上した（事前事後の評価テストより検証，詳細は本校Webサイト参照）。また，読書タイム（朝読書，8:20～8:30）が習慣化しており，学級文庫にあるお気に入りの本を全校一斉に静かに読むことができた。



図7 寺子屋タイムの様子（低学年）

(3) 学校家庭連携プロジェクトの取組について

学習の約束や日常生活全般に関する指導方針についてまとめた「学習習慣指導の手引き（職員

寺子屋タイムの15分間に効果的な個別指導ができるように、T・Tによる指導を増やすなど検討する必要がある。

読書タイムの取り組みが、家庭での読書習慣につながるような工夫が必要である。

個別の目標をもつことができるマラソンカードなどを活用し、自主的に取り組めるような工夫をする必要がある。

(3) 学校と家庭の連携について

学校からの一方的な指導やお便りの発行だけでなく、児童の実態を考慮し、家庭からの意見も吸い上げて、学校と家庭との連携をさらに深めていく必要がある。

全職員での共通理解を図り、学年や担任が替わっても児童が迷わないような指導を心がけるようにする。

教師用「学習習慣指導の手引き」をもとに、児童の実態に合わせた児童用の手引きを作成していく必要がある。

5 実践事例

(1) 実践事例1 <ミニ授業研・ICT活用>

ミニ授業研は、教師の指導力・授業力の向上はもちろん、お互いの指導力をさらけ出すことによって、互いに学び合える関係性を高めることをねらったものである。今年度は、28回のミニ授業研を実施した。



図11 2年音楽のミニ授業研の様子

ミニ授業研では、ICTの効果的な活用に関する

検討も盛んに行ってきた。写真(図11)は、9月に実施した2年音楽の授業の様子である。実物投影機で鍵盤ハーモニカをスクリーン上に拡大投影し、指の動きを見せながら指導している。これだけでも指導効果は高まるが、スクリーン上の指に注目すると、それぞれの指に1~5の「番号シール」が貼ってあるのが分かる。ド・レ・ミ・ファ・ソをどの指で弾くのかをより効率的に確実に指導するための工夫である。

ICT活用は、ただ単にICT機器を使えばいいというものではない。ここで示した実践は、教科指導上の指導困難場面を的確に把握しているからこそ可能になった実践である。このようなIT活用が、密度の濃い授業展開を可能にし、子どもたちに確かな力を身に付けさせている。

教師本来の授業力(授業設計力)にICTが加わることで、より効果的な学習指導ができる。本校では、ICT活用日常化の「次の段階」として、このような実践の日常化を目指している。

(2) 実践事例2 <家庭学習の啓発>

今年度は「家庭学習推進リーフレット」や「家庭学習の手引き」を作成し、生活習慣の改善とともに家庭学習の啓発に力を入れた。

2学期始めに、これらの活用状況等についてアンケートをとったところ、次のような感想が寄せられた。

自分から勉強したい!と思う気持ちはあっても、何をどんなふうにするかで迷うようでしたので、リーフレットや手引きは大変参考になりました。2学期から、調べることの楽しさを身につけさせたいと思います。知らないことを理解したときは、本当にうれしそうな様子です。

リーフレットは、手渡されたとき、一度子どもと一緒に目を通しました。活用と実践となりますと難しいものがあります。今後、時々目を通していきたいと思います。紙面はとても見やすく、よい案だと思います。

家庭学習を通して、学校と家庭、そして親子のコミュニケーションが高まってきている。家庭学習の必要性和習慣化について、今後も家庭と連携しながら取り組んでいきたい。

*下記のアドレスから実践事例が参照できます。

<http://www.cms-school.jp/kitakata/> 北方小学校